



新屈足神社

位置:新得町字屈足2基線37番地

新屈足の開拓は、大正2年(1913)から始まり、当初は入植者が少なかったが、奥田専十郎、袴田栄次郎、戸塚安太郎らの努力により、昭和9年(1934)頃から徐々に増えてきた。

新屈足神社は、屈足2基線37番地に位置し、昭和10年(1935)頃、新規入植者の増加とともに気運が高まり、50cm角の木柱に記した、袴田栄次郎の揮号による「天照皇大神宮」によって建立され、開拓者の安全を祈願したのが始まりといわれている。

その後、南側地区の千間坂に拓殖実習生の仲間により建立された「拓新神社があったが、昭和13年(1938)、この御符も新屈足神社に合祀された。

昭和33年(1958)に宮大工により神殿を新築し、新屈足地区の氏神様として、毎年4月15日・9月15日を祭礼の日として現在に至っている。



写真提供: 袴田 幸男



銘板

岩松トンネルの由来 (十勝上川森林鉄道遺構)

設置:平成10年(1998)11月 位置:新得町字屈足岩松

平成十年十一月
新得町郷土研究会
教育委員会
撰立

急務に當り、十勝上川森林鉄道遺構の岩松トンネルの由来を調査し、その歴史を明らかにする。このトンネルは、昭和十一年(一九三六年)に建設された。当時は、木材の運搬に用いられていた。その後、戦後、このトンネルは、観光資源として活用されるようになった。現在は、このトンネルを、観光客が利用できるように整備されている。このトンネルの由来は、昭和十一年(一九三六年)に建設された。当時は、木材の運搬に用いられていた。その後、戦後、このトンネルは、観光資源として活用されるようになった。現在は、このトンネルを、観光客が利用できるように整備されている。

十勝上川森林鉄道遺構
岩松トンネルの由来



【注記】

岩松ダムと旧中土場のほぼ中間あたりで、大きく湖に山が張り出た、西岸山麓の大カーブに設けられたトンネルである。

岩松発電所・殉職者慰霊碑

設置:昭和16年(1941)10月 位置:新得町字屈足基線242番地

昭和13年(1938)4月、日本発送電株式会社法の公布に基づいて、北海道で最初に建設されたのが岩松水力発電所である。

この発電所は、総発電量3万3000キロワットとし、水力タービン機器をドイツから輸入する計画であった。しかし、日本・ドイツともに戦雲急とあって器材の入手が難しくなり、国内製の6,300キロタービン2基の建設となった。

ちょうど戦時下であって、世界的水準の技術を駆使したダムおよび発電所の建設は、諸条件制約が続出した。時が時だけにこの工事は全て順調には進まなく、一時中断したものの、昭和17年(1942)1月に1号機が完成。同年5月には2号機が完成するが、それまでの工事期間で、ダム建設中に大吊り橋の落下により朝鮮の労務者・タコと呼ばれた強制土工夫、数十人(八十余名)の墜落死者が発生した。さらに、山中を流水する配水管工事等による事故死者等、多くの犠牲もあって完成した発電所である。昭和16年(1941)には、これまでの建設に関わる殉職者を慰霊するために、発電所下の小公園に慰霊碑が建立された。

その後、昭和26年(1951)5月には、電力事業再編成により、北海道電力株式会社に引き継がれたが、近代的設備への歩みに繋がる大事な足跡として慰霊碑は残されている。



岩松神社跡地

設置:平成11年(1991)10月 場所:新得町字屈足基線231番地

巖松神社跡地

昭和2年頃、八幡神社として同番地の中腹に祭礼された。階段が急で歩行が困難なため昭和63年4月平地近くに移す。しかし地域住民の激減により平成10年秋廃止になった。

場所 新得町字屈足基線231番地

設置 平成11年10月30日 新得町郷土研究会



【注記】

入植者の心の支えとして、地域の有志が昭和2年(1927)頃、八幡大神を祭神とした八幡神社を屈足基線232番地の道路沿い山中腹の斜面に祭祀した。太平洋戦争の最中の昭和18～19年(1943～1949)頃にご神体盗難の憂き目に遭った。時が時だけに地域住民は天照皇大神を守護神として、岩松神社と称し、祭礼の日を屈足神社と同じ9月10、11日とした。社殿までは急な階段を何段も上るといふ急斜面であったことから、昭和63年(1988)4月、平地近くに社を移転した。

しかし、社会の変貌から地域住民の激減もあって氏子崇拝者は減少する一方、高齢化も進み、社殿を維持することが困難となったため、平成10年(1998)3月11日に新得神社和田宮司による最後の祭礼が行われ、幕を閉じた。

上富村牛小中学校

設置:平成9年(1997)11月 位置:新得町字屈足トムラウシ(上トムラウシ)



大昭和年と五中し数てい同 校が が八地 五 一わけ た昭 トム 上
 原和間し十学たえ離っ四にそ認昭開年区こ年続陣か者しめ和トルム大 上
 始四なおのて八校た農た十学のそ可和設十にうのいとにののかし、のに以上ラウシは、 正
 十開年、歴の名へこ児者が六校後てさ三一もし十てて開入し、のにの遠隔地は、 年
 九開年、この史の役の統の童が、年給、分れ、一た。二校開をこ開の地戦開指は、 代
 年拓年、この近も業とめ徒え三話が設、分、一。二校開をこ開の地戦開指は、 小
 十拓年、この近も業とめ徒え三話が設、分、一。二校開をこ開の地戦開指は、 中
 一苦、この近も業とめ徒え三話が設、分、一。二校開をこ開の地戦開指は、 学
 月、この近も業とめ徒え三話が設、分、一。二校開をこ開の地戦開指は、 校
 新得町教育委員会
 新得町郷土研究会



【注記】

トムラウシ地域には、終戦後の緊急開拓にともない、富村牛小学校(岩松小学校ニペソツ分校として昭和23年(1948)開校)開校後、同28年(1953)に上富村牛分校を開校したが、同37年(1962)6月29日の十勝岳噴火後、離農が続き、閉校となった。

富村牛小学校下富村牛分校

位置:新得町字屈足トムラウシ(キナウシ)



昭和37年(1962)3月、本校である富村牛小学校から10km以上離れたキナウシ地区への分校設置が認められ、とりあえず中心地にあった貴名牛神社社殿(19.8平方m)を利用、児童数6名をもって、富村牛小学校下富村牛分校が開校された。

この学校は「鳥居のある学校」として話題になった。

その後、昭和39年(1964)3月、トムラウシ17番地の離農者の家屋を改造し、分校を移し、昭和44年(1969)3月まで単級で続けられたものの、児童1名となったため、再び富村牛小学校へ統合されることとなった。



離農者の家屋を改造した分校



分校開校式(昭和39年7月15日)

写真提供: 富田 明美



富村牛神社

位置：新得町字屈足トムラウシ(ニペソツ川右岸河口)

昭和6年(1931)頃、王子製紙原料材の造材中の中村組の下請業者吉本造材が本流合流のニペソツ川右岸地点に鳥居を建立し、造材の安全祈願を祀ったのが最初といわれている。

戦後入植した獅子原茂一、佐藤留治、武藤博らが伊勢神宮の分霊、奉遷をしたが、同26年(1951)に入植者で宮大工であった溝渕与四郎がニペソツ川右岸丘陵地に神殿を建立して祀った。

その後、浅野五郎、飯山清司が鳥居を再建、同61年(1986)伊藤秋男(悲願桜の伊藤伝五郎の子息)が境内に桜30本を寄贈、例祭を9月第一日曜日と決め、祭礼が行われてきた。

また、平成13年(2001)には、全国宝くじ配分金450万円の交付を受けて、御輿を作り祭礼を行っている。



貴名牛神社

位置：新得町字屈足トムラウシ15番地の川向かい

昭和24年(1949)、字屈足トムラウシ19番地内に、中村組造材部責任者であった川村嘉茂治をはじめ、キナウン地域住民の奉仕により創建された。神殿は、当時帯広営林局によって進められた、トムラウシ林道橋りょう大工の庄子忠(本別町井出組)が建立。拝殿は、19.8平方^{キ。ム}で、資材はすべて中村組の提供で建設され、新得神社のご神霊を分祀した。

祭典は、当初5月10日・9月20日とされたが、昭和48年(1973)十勝ダム着工水没地点となったため、ご神霊を戻して廃止した。

昭和58年(1983)十勝ダム建設公共企業体では、同ダムの安全祈願を込め、トムラウシ15番地(旧俗称、赤岩)の川向かい岩頭頂上に、金属製の社殿並びに鳥居を建立、新得神社のご神霊を奉祀し、貴名牛神社を襲名した。祭神は、天照大神。



参考文献：新得百年町史

佐幌小学校百周年記念誌「時をこえて」
上佐幌小学校閉校記念誌「永久しえに」
屈足小学校100周年記念誌「くったり」
「遙かな道のり」 田近正俊随筆集